

となりのクラスはオーストラリア！

山口市立仁保小学校 教頭 中倉 宗利

(平成 15 年度派遣 オーストラリア シドニー日本人学校)

## 1. はじめに

シドニーに派遣を伝えられたのが平成 14 年の冬だったと記憶しています。その後、2 月につくばで 15 年度に派遣される全教員と一緒に 1 週間ほど研修を行いました。シドニーに派遣される他の教員もそこで初めて顔を合わせます。私を含めて 4 人でした。インターネットで、シドニー日本人学校の受け入れ担当の先生と連絡を取りながら、勤務のことはもちろん、生活の仕方や様子などいろいろと聞くことができ、不安もかなりありましたが、少しずつ準備を進めることができました。



広大な敷地にある立派な校舎とグラウンド

## 2. シドニー日本人学校の特徴

(1) 国際学級が併設されている世界で唯一の日本人学校(当時)として、オーストラリアの小学生と日本人が学ぶ学校で、教室が隣同士になっているのが特徴でした。国際学級は現地の教員を雇って現地の教育課程で教えていますが、音楽、図工、体育はミックスレッシンといって合同で授業をしていました。職員室も一緒です。運動会やスクールコンサートなども合同でやっていました。現在のウェブページを見ると以前とは様子がずいぶん変わっているようですが、運動会やスクールコンサートなど今も続いているものもあるようです。



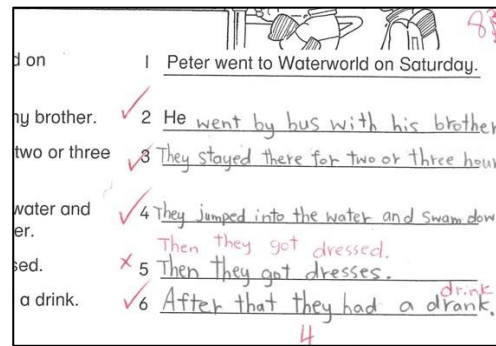
図工のミックスレッシン

(2) 日本人の子どもも、オーストラリアの子どももお互いの言語はもちろん、サーフィン、クリケットなどオーストラリアならではのもの、習字、剣道、茶道など日本ならではのものもそれぞれ学習できるので、お互いの文化からたくさんことを学びます。卒業式や始業式などそれぞれの式では、「君が代」と「Advance Australia Fair」をそれぞれ歌い、国旗も両方掲げられます。日本人学校とはいえ、オーストラリアで暮らしていることが身に染みて感じられました。



式では両国旗が掲げられ、両国歌が歌われる

- (3) シドニーは日本と比べ、気候、生活のきまりや習慣がずいぶん異なります。
- ・モーニングリセスといって中間休みにおやつを食べる習慣があり、日本の子どもたちはおにぎりなど食べていました。
  - ・日本の学校では集会などで、みんなが集まったりして座るときは、いわゆる「体育座り」をしますがシドニーでは、男子も女子もあぐらをかいて座る現地の子どもが多かったです。初めは違和感を覚えました。
  - ・学校では必ず教員が子どもを見守り、子どもたちだけで過ごすことはいけないことになっています。そのため、朝や昼休みは教員が順番で見守る約束になっています。
  - ・日差しが強く、紫外線から身を守るため、屋外ではフラップ帽という首の後ろに日よけのついた帽子を必ず被る約束になっています。派遣教員も屋外ではサングラスが欠かせません。
- (4) 英語に特化した教育が特徴で、EFL と言って毎日 1 時間、現地教員による英語の授業があります。おかげで子どもたちの英語力はかなりのもので、小学 2 年生で英検準 1 級を取得したいという相談があってびっくりしました。テストやプリントで、正解の○が✓で丸付けをされるのがオーストラリアだそうで、初めて見た時、「あっているのになぜ？」という感じでした。



### 3. 派遣教員としての経験

#### (1) 南半球ならではの学び

苦労したのは南半球のため、理科の先生は天体を教えるのに苦労されていました。太陽や月は東から昇って北を通って西に沈む、上弦の月は、日本では右側が光っているが、シドニーでは左が光っている、さそり座やオリオン座はひっくり返っているなど・・・また、社会の気温の変化の学習ではシドニーの気温が紹介されていて、これもひっくり返っていました。実際の様子と教科書とは違いながらも、日本に帰る子どもたちがほとんどなので教科書を教えることが大切であると考えました。

#### (2) 経営としての学校

ご存知の通り、日本人学校は私立なので、授業料等から学校を経営しなければなりません。膨大な敷地やたくさんの施設があるシドニー日本人学校も児童生徒数の減少により、経営の立て直しを余儀なくされ、魅力ある学校づくりとして、バイリンガル、国際教育に力を入れて児童生徒数の確保のための様々な動きが始まりました。自家用車に、学校の広告のステッカーを張るようなことも管理職は行っていました。

#### (3) 現地でのコミュニケーション

勤務で必要な英語の文書の翻訳や日頃の現地教員とのやり取りなど、通訳がいるわけではないので生活も含めてかなり高い英語力が必要になります。英語なら中学生から勉強してきたので少しはわかるだろう、と高をくくっても特有のなまりや早い口調でなかなか聞き取れません。特に電話は、相手のジェスチャーすらわからないので、やりとりに相当苦労しました。社会見学で行く水族館の予約を自分で電話をしなければ

✓が正解のしるし

ならず、無事に行けてほっとしたことがありました。さらに、職員会や全体の打ち合わせは英語なので、自分が提案などするときは、事前に英文を考えてから伝えることの繰り返しでした。英語が話せたらどんなに楽だろうと、何度思ったことでしょう。

#### 4. まとめ

派遣教員は全国から集まるので、通勤が電車、学校に駐車場はない、卒業式などは紅白の垂れ幕を掲げる、など山口県ではあまりきいたことがなく、地方によってずいぶん環境が違うのも興味深かったです。英語が通じず、仕事もハードで苦勞しましたが、やがて日本に帰国する子どもたちが日本でも活躍できるよう、よりよい学習指導や学級経営を考えることに一生懸命だったことを覚えています。帰国してからは、社会科の国際社会の学習でシドニーでの経験を子どもたちに伝えることができました。

3年間の派遣教員としての勤務は、とても貴重な経験でした。家族と現地で暮らすことや観光で各地を訪れたことも、普通ではまず経験できないよい思い出になりました。派遣時は受け入れ担当の方に家や車のお世話をしていただき、帰国する時には、たくさん先生方が見送ってくださり、無事に素晴らしい3年間を過ごせたことに感謝しています。いつかまたシドニーを訪れて、当時の記憶をたどってみたいと思っています。



メルボルンで見つけた野生のコアラ